慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アイヌラツクルの傳説(金田一京助著, 世界文庫刊行會編並發行)
Sub Title	
Author	曾根, 研三(Sone, Kenzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.2 (1925. 5) ,p.141(301)- 144(304)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250500-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

夷語學の鼻祖上原熊次郎先生逸事に分たれ、いたるところこの廢殘的民族に對して深甚なる同情がそゝがれてゐる。さうして彼等の心情と融合して、そこから自らに理解を得やうとするつゝしみぶかい態度と、おくまで獨斷を避けやうとつとめらるゝ謙遜と周到なる用意とは、氏にのみ許されたる奥床しさである。

吾々はわが國史を繙くとき、わが大和民族が長い間接觸鬪爭したる異民族として東北における蝦夷に會するのであつて、吾々は直ちにこの蝦夷を今日のアイヌに擬定しようとするのである。しかしこれは最も素朴的方法と言はねばならず、そこに學問的證明を要するのであるが、吾々は本書によつて始めてその解決を與へらるゝのであつて、『上の方から蝦夷を辿つて降ればいつしかアイヌになつて來、下の方から北海道のアイヌに遡つて辿つて行くと昔の蝦夷になつて、この間に寸分の切れ目がない』ことを知り、またこの民族の稱呼であるアイヌ、アイノ、エミシ、エビス、及びエゾの關係についても明快に敎へらるゝのである。最近また世上に喧傳されたるジンギス汗は義經なりなどといふ議論は、本書の義經傳說を一讀すれば到底唱へ得られない俗論であることがわかり、また蝦夷に關する古文獻の研究のごときは、異民族に對して理解すくなき歷史家の蒙を啓くこと頗る多大であらう。殊に著者が敏感なる言語學者であるだけ、その傳承や詩歌は他の追隨を許さない獨特のものであることは言ふまでもない。

要するに本書は著者の十數年間の勞苦より生まれたる紀念塔であつて、同時にわが日本人の手になれる眞に唯一の綜合的アイヌ研究書と稱すべく、本書を得たことによつてわが學界に如何ばかりのつゝみを感ずることであらうか。著者に對してこゝにかぎりなき敬意をさゝげたい。

（松本芳夫）

アイヌラツクルの傳說（金田一京助著　世界文庫刊行會編並發行）

今は亡きアイヌの乙女が、「太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて野邊に山邊に嬉々として暮してゐた多くの民の行方も又何處。僅に殘る私等同族は、進み行く世のさまにたゞ驚きの眼をみはるばかり。而も其の眼からは一擧一動宗敎的感念に支配されてゐた昔の人の美しい魂の輝きは失はれて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがられならぬ」と嘆き悲しんだ、政治的滅亡に頻したアイヌの間にも「其の昔此の廣い北海道は私等先祖の自由の天地でありました。天眞爛漫な稚兒の樣に美しい大自然に抱擁されてのんびりと樂しく生活してゐた」（アイヌ神謠集）のであつた。然し悲しい事には其の自然的平和が生んだものも乙女に取つては「愛する私たちの先祖が起伏す日頃互に意を通ずる爲に用ひた多くの言語、言ひ古し、殘し傳へた多くの美しい言葉、それらもみんな果敢なく亡び行く弱きものと共に消失してしまふのでせうか」（同上）と不安な落ちつきのないオロ〳〵とした氣持に惱まされ、すべて彼等が生んだ物語や、神々の話を記し留めようとした、かよわいながらにも、雄々しい氣持は、僅に「アイヌ神謠集」一篇で終つて亡き數に入つてしまつた。よしさらば彼女の嘲つようにに政治的に民族が滅ん

で行かうとも、物語や神話が記錄に留められるならば、丁度猶太人に於ける舊約のように、其の文化は何時までも記念されて行くのである。然し悲しい事にはアイヌ乙女の殘し行く寶は少なかつた上に、まだ神話としていふには余り神謠といふ色彩が强かつた其の不備の點や、或は神々の物語をもつと〳〵私等に示さうとして下さつた著者は、遂に曾て「アイヌ聖典」として出されたものを譯して、私等にもよく其の神々の物語を、味ふ事が出來るようにして下さつたのである。そして一つには、乙女の殊勝な氣持も是によつて報ひられたような氣がする。著者は此の書の初めに「これはアイヌの人文神話を集めたものです。即ち、ｵｲﾅ（傳承古傳）及び、ｶﾑｲﾕｶﾗ（神謠神曲）です。その重要なものはアイヌ聖典（世界聖典全集後篇第十四卷）に出したのですが、あれは原文對照で讀むに骨が折れるから、讀み好く書き下してはといふ松宮さんの御勸めによつて試みに書き下したものです」といはれておる事で、此の書の生れて來た經路も分るし、其の譯し方に當つても著者は「書く自分が興味につられて話を面白くし過ぎてはいけないと充分注意をしたつもりですが、それでも餘り原文に忠實にすると、注釋がないとわかりにくくなるし、餘り單純化しすぎると、吾々の發想法に爲つてしまふのでどうもほどよく行きかれて、妙なものになつてしまひ甚だ慚愧にたへません」と非常に謙遜な詞を用ひられておられるが、內容を一度よんで見た我々には謙遜されいば、される程、益々其の譯し方の努力がしのばれて、到底著者ではない、なまかちりのアイヌ研究者では出來ない仕事だと思はれる、まして其の載せられた神々の話の原文が「私自身ちかに彼等（アイヌ）の口から採錄したもので、皆しつかりしたアイヌ語の本文のあるものばかりでありますから」と、いはれておるのは、如何に珍らしい外には誰も知らない物語であるといふ事を思はせて少くとも此の方面に興味を持つておる人の讀まなくてはならぬ著述だと思ふ。其の內容は

（一）アイヌラツクルの生ひ立ちの話（少女達の陰口から家系を知る話）

類話（親の惡口を云はれて憤る話）

異傳一（父は日神）

異傳二（父は雷神）

異傳三（父は歲神）

異傳四（同別傳）

（二）アイヌラツクルの結婚の話（忍別の魔女から浪速媛を救し出して婚する話）

別傳一（雲後の魔女と戰ふ話）

別傳二（雲の關の魔女から波下媛を救ひ出して婚する話）

類話（黑狐の手から妹を救ひ出す話）

異傳一（雷神の妹を娶る話）

異傳二（鄕神の妹をもつ話）

異傳三（日影媛と結婚する話）

異傳四（天神の妹と婚する話）

（三）アイヌラツクル、惡魔から神を救ひ出す話（魔神の手から

日の女神を救ひ出す話）

類話（魔神の手から家神を救ふ話）

（四）アイヌラックル人間生活の元を開く話（天上の風をこの土に移す話）

別傳（羽衣傳説を含む説話）

類話一（靈鳥の訓で祭神を知る話）

類話二（幼いアイヌラックルの話）

（五）アイヌラックルが人間世界の饑饉を救ふ話（饑饉の時に最後の穀を酒に造りて狩の神を祭る話）

別傳（裏面に隱れてゐる話――アイヌ神謠集に現れた、梟の神か自ら歌つた謠「コンクワ」）

類話一（饑饉魔を遠方へやる話）

類話二（饑饉魔を欺きて殺す話）

類話三（饑饉魔と戰ひ地獄へ蹴落す話）

類話四、五（類話の二、三、の別傳――アイヌ神謠集に見えし、小オキキリムイが自ら歌つた謠「クツニサクトンクトン」。及び、同じく、小オキキリムイが歌つた謠「タノタフレフレ」（この砂赤い赤い）

（六）アイヌラックルが惡神を懲らす話（南風の魔女を懲らす話）

類話一（北風の魔女を懲らす話）

類話二（類話一の別傳――アイヌ神謠集の、孤が自ら歌つた謠「ハイクンテレケハイコシテムトリ」）

類話三（龍蛇を平らげる話）

類話四（角鮫の巨魔を懲らす話）

類話五（荒熊を懲らした話）

類話六（疫病神を擊退する話）

（七）アイヌラックルが神を崇めて禍を免れる話（狐神の告で大洪水の難を免れる話）

類話一（砂むぐりの神を尊ぶ話）

類話二、三、四（アイヌ神謠集の、蛙が自ら歌つた謠「トーロロハンロクハンロク」。及び、獺が自ら歌つた謠「カツパレウレウカツパ」。或は、沼貝が自ら歌つた謠「トヌペカランラン」等を參照）

（八）アイヌラックル神々の元を露はす話（大海龜が元を露はされた話）

類話一（病魔の元をあかして妹を癒す話）

類話二（感冒のもと、瘡のもとの話）

（九）アイヌラックルの晩年の話、（イ）アイヌラックルがアイヌの國土を見すてる話。（ロ）妹がアイヌの國土を懷ひ泣く記。（ハ）アイヌラックルがアイヌを怒つたわけの話）

（十）小アイヌラックル、小オキクルミの話（アイヌラックル二代かゝつて大鯢を征服する話）

別傳（必ずしも二代でない同じ話――オキクルミと小オキクルミとが）

類話（子のアイヌラックルが角鮫、熊を探す話）

といふのであつて、要するにアイヌラックル（一名オキクルミ）の生涯の物語である。其の物語も決して同一人の口から語り聞か

れたのを記されたのではなく(一)、(二)、(三)の話はトメキチの傳承であり(四)から(九)に至る間はタウクノの傳承であり、(十)はヲカルパの物語なのである。是等大系の間に挿入されてゐる、類話、別傳、異傳等についても一々確實なる傳承者を擧げられてゐるのは著者が、白い雪に埋もれた北海道で寒氣と戰ひながら最後の勝利を得られた苦心努力を語るものである。其の內容の記述法は前記によりても知られるように、先づ、大系の話を書いて、その話に關する別傳、或は類話、或は又異傳等を列擧して其の比較研究に便ならしめ、それによつて私のような全然、無定見、無知識な者の頭にも春霞のように、ポンヤリと彼等の生活信仰をそうかしらんと想像させて頂く事が出來るのである。著者も又、そういふ心持で此の物語を譯されたのでなからうかと思はれるのは此の書の最後に「既に述べた數十篇の說話で見るやうに、アイヌラツクルに關する色々樣々の傳へは、同一人の事功としては、いくら神人の事だとしても、不可能であるほど多すぎる。また述べ方の上には、甲が乙と必ずしも何の交涉がない。それ故、各々の傳へを皆事實とするには、どうしてもアイヌラツクルを少くとも二人以上に了解しないでは出來ない」といふような比較研究のひらめきが見えるのでも分ると思ふ。著者は單に此の物語を述べられるのを目的とせずに、其の物語からアイヌの生活、信仰等いろ〳〵なものに觸れようとせられたのである。そして其の決心に背く事なく成功しておられるのが此の著述なのである、心なしか。雜司ヶ谷に眠つてゐるアイヌ乙女の嬉しさを示してゐるのであらうか、暗い凄い冬の夜に名も知らぬ、又、見た事もなかつた星が一つ、淋しい、嬉しさうに輝いてゐるのが見える。

(大正十二、十二、十九　曾根研三識)

伊豫史精義(景浦直孝著　伊豫史籍刊行會發行)

量に愛媛縣史の編纂にたづさはり、現に伊豫史談會の幹部として知られる稚桃景浦直孝氏は過去十餘年間の研鑽の結晶たる伊豫史精義なる約千頁の著書を公にせられた。今其の書を一覽するに同國の有史以前より近代に至る迄の事實は網羅せられ、實に其の精義の名に背かず、學界有益の書たるは云ふまでも無い。

本書は緒論、有史以前、大和朝廷時代、律令撰定時代、奈良時代、平安時代、源平時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戰國時代　織豐時代、江戸時代、明治以後に大別し、更にこれを章節に分かつて記述せられ、其の緒論に於ては「鄕土史の意義に就いて」、「鄕土史に對する主張」、「鄕土史研究に際しては左の諸點に注意すべし」の三說に就いて論述せられてゐる。猶卷末に「伊豫史研究重要史籍」が附せられ、これは伊豫に關する諸書の解題で參考となるところが多い。この外追加補正、索引も添へられてゐる。本書の內容の詳細に就いては異日に讓り、今は單に本書の學界にあらはれたるを紹介し、謹んで本著者に敬意を表するものである。

(大正十四、四、一　武田勝藏)

香川縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第二(香川縣同調査會編)

本書は第一篇史蹟及名勝の部、第二篇天然記念物の部の兩篇に